東京都区内の単学級小学校における若手教員の育成に関する研究

所属校：板橋区立金沢小学校
氏　名：熊　　木　　崇
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：若手教員育成・若手教員の不安や悩み・単学級小学校・初任者研修

Ⅰ　研究の目的

東京都では、教員の大量退職時期の到来や今後数年間続くと予想される児童・生徒数の増加傾向等に対処するために、大量の教員を採用し、それらの教員の指導力や資質能力の向上に努めなければならない状況にあり、学校においては初任者教員を中心とした若手教員の指導力の向上が重要な課題となっている。特に、単学級規模の小学校においては「初任者でも学年を任され責任ある校務を担わなければならないこと」などから、喫緊の課題となっている。

そこで本研究では、単学級小学校における若手教員の人材育成上の課題について調査を行い、組織的・計画的に人材育成が図られるようにする。

※　本調査においての単学級小学校とは、全学年が単学級の小学校のことである。

Ⅱ　研究の方法

1　対象校：東京都区内の単学級小学校（１０４校）

2　対象者：調査対象校の管理職及び若手教員

3　調査内容

①　若手教員の悩みと解決方法

②　若手教員の悩みと赴任してよかったこと

③　管理職が行っている若手教員育成の実践

※　比較を行うため「若手教師の悩みに応える　２００８年４月」（財団法人教育調査研究所）の報告書（調査地域：２８都道府県（学校規模は無関係））を引用する。以下、財団調査という。

Ⅲ　研究の結果

1　回収

・　学校管理職（選択肢・記述式）　61名

・　学級担任（選択肢・記述式）

　経験1～2年目　38名

　経験３年以上（異動経験なし）　65名

・　専科・少人数等（記述式）　29名

2　表の見方

(1) 選択肢の結果

・　財団とのポイント差１５以上　→　太字下線

・　財団とのポイント差５～１５　→　太字

(2) 記述式の結果

文中のキーワードを分類して回答者の割合を算出

(3) 調査結果

ア　若手教師が悩んでいること（管理職が課題と感じていること）【選択肢】

	若手（経験１・２年目）		若手（経験３年～）		管理職	
	区内単級学担	財団	区内単級学担	財団	区内単級	財団
授業がうまくいかない	７５．７％	７１％	**９０.３％**	**６７％**	６７.２％	６６％
子供の褒め方・叱り方	**５４．１％**	**６２％**	**７１.０％**	**５９％**		
子供のいじめやトラブル	**５１．４％**	**３４％**	**５８.１％**	**４１％**	**２３.０％**	**３８％**
学級にまとまりがない	**４３．２％**	**３４％**	**４５.２％**	**３４％**	４４.３％	５７％
学級事務や校務分掌の処理	**４３．２％**	**２９％**	**５３.２％**	**２３％**	**２６.３％**	**１８％**
生活指導がうまくいかない	**４０．５％**	**３４％**	**４５.２％**	**３６％**	４２.６％	４１％
保護者の苦情	３５．１％	３１％	４８.４％	５３％	**３１.１％**	**５３％**
評価の仕方がわからない	**３５．１％**	**２７％**	**４８.４％**	**２１％**		
教材研究の仕方がわからない	**３５．１％**	**２１％**	**３７.１％**	**１５％**		
ある子供の指導で行き詰まった	２９．７％	３４％	４８.４％	５１％		
同僚・先輩との人間関係	２１．６％	１７％	**２７.４％**	**１０％**	１６.４％	１８％
個人面談や家庭訪問	**１６．２％**	**６％**	１２.９％	１０％		
子供との人間関係がよくない	１０．８％	１０％	**１９.４％**	**１４％**	**２３.０％**	**３５％**
教職に意欲や使命感がもてない	２．７％	５％	８.１％	６％	１３.１％	１２％
悩みを相談する人がいない	２．７％	４％	**２４.２％**	**４％**		

○　「授業がうまくいかない」の割合は、単学級小学校の経験３年以上では特に高くなっている。

○　「子どものほめ方・叱り方」「教材研究の仕方」「評価の仕方」「学級事務や校務分掌の処理」の割合は、単学級小学校においては経験を重ねると悩む割合が増加している。

○　「悩みを相談する人がいない」の割合は単学級小学校の経験３年以上で高くなっている。

イ　若手教師はどのようにして自分の悩みを解決しているのか。【選択肢】

	若手（経験１・２年）		若手（経験３年～）	
	区内単級学担	財団	区内単級学担	財団
先輩の先生に相談する	９２．１％	９０％	**９２.２％**	**８７％**
管理職に相談する	**６３．２％**	**４５％**	**７５.０％**	**５１％**
本や資料で勉強する	**５７．９％**	**４９％**	**５７.８％**	**４８％**
若手教員同士で話し合う	**４７．４％**	**５５％**	**４２.２％**	**５２％**
信頼している人に相談する	**４７．４％**	**４０％**	４６.９％	４４％
家族に相談する	**３９．５％**	**２２％**	**３２.８％**	**２１％**
他校の先生に相談する	**２６．３％**	**２０％**	**３７.５％**	**２７％**
自分だけで徹底的に考える	**２６．３％**	**１３％**	**２５.０％**	**１１％**
時間が解決するまでじっと耐える	７．９％	６％	**１４.１％**	**８％**
学年の先生に相談する	**０％**	**７５％**	**０％**	**７６％**

○　単学級小学校では、同学年の先生に相談する機会がない一方で、管理職、家族、他校の先生に相談するなど、自分の悩みを解決（解消）するため

に、努力している様子が伺える。

○　「自分だけで考える」「時間が解決するまで耐える」割合は単学級小学校の方が高い。

ウ　管理職は若手教師の悩みにどのように対応しているのか。【選択肢】

	区内単級	財団
管理職による授業観察指導	８８．５％	９０％
週案のコメントで配慮	**７３．８％**	**５８％**
相談しやすい雰囲気をつくる	**６３．９％**	**７７％**
先輩教員と懇談	５９．９％	５７％
管理職による悩みを聞く懇談	**５４．１％**	**６２％**
苦情の処理に管理職が関与する	**４１．０％**	**６６％**
若手教員に教職員から声をかける	**３２．８％**	**６５％**
若手教員の会をつくり懇談する	１３．１％	１０％
悩みに関する研修会を実施する	８．２％	８％
教育相談に行かせる	４．９％	８％

エ　教員として一人前になるために重視していること。【選択肢】

	若手（経験１・２年）		若手（経験３年～）		管理職	
	区内単級学担	財団	区内単級学担	財団	区内単級	財団
授業をする力	９７.４％	９４％	８９.１％	９２％	**９６.７％**	**８５％**
学級をまとめる力	**６５.８％**	**５５％**	５９.４％	６１％	５２.５％	５５％
子供との人間関係	**４７.４％**	**５７％**	５６.３％	５９％	４９.２％	５１％
生活指導をする力	２６.３％	２２％	**１５.６％**	**２４％**	**３２.８％**	**２７％**
保護者との関係	２１.１％	２５％	**２１.９％**	**１１％**	２１.３％	２４％
学級事務や校務分掌の処理	**１５.８％**	**１０％**	**２０.３％**	**１１％**	**１３.１％**	**２％**
意欲や使命感	１０.５％	１０％	１２.５％	１５％	**１６.４％**	**２４％**
同僚・先輩との人間関係	７.９％	６％	４.７％	８％	３.３％	４％
子供のトラブル調整力	５.３％	７％	**１２.５％**	**７％**	４.９％	８％
挨拶、言葉遣い、服装、礼儀	**０％**	**６％**	４.７％	６％	１１.５％	１４％

○　「学級事務や校務分掌の処理」の割合は単学級小学校の全対象で高い。

オ　印象に残っている不安、悩み、苦労したことのまとめ【記述式:132人中(専科含む)上位5項目】

不安、悩み、苦労したこと	人数	割合
学習進度が分からない、授業の進め方が分からない、学力がついているか不安、授業づくりや教材の意味が分からない	48人	36.4%
学校行事（運動会、学芸会、遠足、社会科見学等）の準備や進め方	27人	20.5%
校務分掌や学年業務が多い、１年目でも何かの主任になる、いつどこで提案したらよいのか分からない	18人	13.6%
保護者対応（苦情含む）、保護者会・個人面談の進め方、保護者の要望（価値）の違い、通知表に対するご意見	17人	12.9%
周りの先生も忙しそう（聞きづらい、話しかけづらい、相談しづらい）手取り足取り指導してくれる人はいない、身近に相談できる相手がいない	15人	11.4%

カ　単学級小学校に赴任してよかったことのまとめ【記述式:132人中(専科含む）上位5項目】

赴任してよかったこと	人数	割合
全校児童の名前と顔が一致する、子供たちと濃く深く触れ合う、全校児童の様子が分かる、子供と向き合う時間が長くなる	57人	43.2%
自分のペースで学級経営ができる、自分のカラーが出せる、自分のアイディアを活かせる、自分の思った方法で授業実践できる	33人	25.0%
職員の人間関係がよい、学年専科を超えてつながり合える、一体感がある、全体で協力して進むことができる、共通理解が図れる、職員の結束が堅い	24人	18.2%
校務分掌等の様々な仕事を経験できる、実践しながら仕事を速く覚えられる	21人	15.9%
一人で担う仕事が多く自分の仕事に責任を強くもつようになる、責任ある校務分掌を任されるので鍛えられる、自分で行動しようという姿勢になる	15人	11.4%

Ⅳ　考察

１　調査から分かったこと

(1)　目標や指標をもちにくい

単学級小学校には同学年の隣のクラスがないので、数年経験した若手教員も自分のやっていることに自信がもてなかったり、方向性があっているのか不安を感じたりしている。

(2)　相談する機会が少ない

同僚の先生方も忙しく、しっかり相談できる時間がとれなかったり、担当学年が異なることで具体的な内容について相談しづらかったりしている。中には「周囲の先生方が忙しそうだから」と相談することをあきらめてしまう若手教員もいた。

(3)　校務分掌や学年の仕事の負担が大きい

単学級小学校では「主任の一人一役」は当然であり、初任者も例外ではない。学級担任や教科担任としての仕事に日々悩みつつ取り組んでいる若手教員が学年等の行事や会計にも取り組み、校務分掌では全校にかかわる提案も行わなければならない。

２　単学級小学校における若手教員育成のための方策

(1)　全校体制による若手教員支援

若手教員が一番知りたいのは「現在、自分が取り組んでいる授業や行事にどのように対応すればよいのか」であった。そこで、先輩教員が自分の担当する教科等の教材や資料を提供したり、授業観察を増やしたりして、一緒に教材研究をする時間を確保する。特定の先輩教員に負担が集中することがなく、若手教員も相談しやすくなると思われる。

(2)　学級運営の手引きの共有

単学級小学校では、隣のクラスがないので学級内で行われる諸活動について学ぶ機会が少ない。そこで、全教員が「席替えの仕方」「係活動の進め方」などの学級運営にかかわる内容をテーマ毎に簡単にまとめ、冊子にする。これにより、若手教員が自分のクラスの実態にあった方法を選択しやすくなると共に、質問や相談するきっかけともなる。

(3)　近接小学校との連携による育成

単学級小学校では、同学年の実践が学びにくい。そこで、近接小学校の同学年の教員と連携し、教室掲示などを見たり、現在の授業内容についてアドバイスをもらったりする時間を確保する。

(4)　各校務分掌の手順及びデータの共有化

初任者でも校務分掌の中心的な役割を担う場合が多い。そこで、いつ、何を提案すればよいのかなど、前年度の担当者が仕事を進める手順を明確にしておくと共に、誰でもすぐに必要なデータを取り出せるように整理しておく。

(5) ミニ研修会の実施

模擬保護者会、体育実技研修など若手教員の課題に応じたミニ研修会を行う。若手教員だけでなく、先輩教員にとっても確認する絶好の機会となる。